

## 書評：

### 竹村牧男『ブッディスト・エコロジー ―共生・環境・いのちの思想―』

ノンブル社、2016年、309頁、定価3,000円＋税

水谷香奈（文学部）

#### 1 はじめに

2016年は国内外において、不寛容や生きづらさを感じさせるニュースが多数飛び交った年であった。国内ではリオ五輪での金メダルラッシュなど明るい話題もあったが、一方で障害者施設で起きた元職員による刺殺事件は、差別なき社会の実現の難しさを我々に突きつけた。不適切な労働条件による事故・事件も相次いだ。世界に目を向けると、アメリカ大統領選で過激な発言を繰り返したドナルド・トランプ氏の当選と、イギリスのEUからの離脱決定が与えた衝撃は大きかった。両者の共通点の一つが、従来重視されてきた環境問題や移民問題などにおける国際協調への否定である。しかし、異質なものへの偏見や排除、環境や人間性の軽視と経済優先、そして自己（自国）の利益を最重要とする姿勢が何を生み出すのか、私たちは過去において学んできたのではなかったか。



本書は、そのような現代においてこそ注目されるべき「共生・環境・いのち」の問題について、著者が2002年に東洋大学文学部に赴任して以降、長年にわたり蓄積してきた論攷を集成したものである。学術書ではないが、著者の専門である唯識思想のほか、華嚴・密教・禅・浄土・律・天台等といった広範な仏教思想を縦横無尽に用い、時にはディープ・エコロジーと仏教との思想的関連にも言及しながら、仏教徒が環境問題等についてどのように対処すべきかというところまで視野に入れた考察が展開されている。書名の「ブッディスト」とは「仏教の」という形容詞であり、著者によればこの書名の意味は、「仏教の共生・環境・いのちをめぐる思想」（p. 308）である。本書の構成も、次のように書名に従い全体が三部に分かれ、それぞれに共生・環境・いのちを主なテーマとした論攷が配置されている。以下、その内容を概説したい。

#### I 共生の思想

共生のあゆみと課題

自然と他者と―禅の立場から

空海の人間観をめぐって——己心の中の曼荼羅という思想

## II 自己と環境

自然との共生と日本の思想

己事究明としてのエコ・フィロソフィ

仏教に基づく生活指針——新大乘戒の提唱

## III いのちの深みへ

人生の苦を見つめて

仏教の死生観——輪廻とは何か、そこからどう脱却するのか

仏教と神秘主義——禅と密教を中心に

あとがき

## 2 「I 共生の思想」の概要

本章では、まず「共生のあゆみと課題」として、共生に関する思想がどのように展開してきたのかを概観している。紹介されている内容は、大正時代に活動した仏教者椎尾弁匡の「ともいき」運動、20世紀後半に建築家の黒川紀章が提唱した共生の思想、井上達夫をはじめとする多くの論者が言及する共生の原理、共生社会システム学会の掲げる共生の概念や理念など多岐にわたる。総じて言えば、「共生」とは、相互の自立と個性を尊重し、決して同一化・同質化に導くものではなく、多様性や異質性を保持しつつ相互補完的な関係性を認識していくもの」(p. 19) だとする井上らの定義に代表されるであろう。このような共生についての仏教的な裏付けとして、著者は「①平等思想、②縁起思想、③特に華嚴の縁起思想(六相円融義)、④大乘の理念、⑤善悪観、⑥行為論、⑦大拙の自由論」(p. 39) といった諸方面からその思想的根拠を探っている。

続く「自然と他者と——禅の立場から」では、主に唯識思想と禅思想に基づいて、心身と環境の一体性が述べられる。唯識思想では、深層意識の一種である阿頼耶識の中に主観面と対象面(自己の身体、環境世界)が備わっているとす。すなわち、私たちの心・身体・環境がワンセットになっているのであり、これをいま・ここ・自己の事実において自覚するのが禅であるとして、著者は鈴木大拙、十牛図、枯山水などの例を挙げながら、禅において説かれる自己と他者の一体性の中に、共生思想へとつながる視点を求めていく。

そして、「空海の人間観をめぐって——己心の中の曼荼羅という思想」において、自己とあらゆる他者とが浸透し合うという人間観・世界観を、唯識や禅とは異なるかたちで説く思想として、密教にも言及する。著者は空海の『卍字義』、『秘蔵宝鑰』、『弁頭密二教論』、『十住心論』、『即身成仏義』などを引きながら、空海思想では自己は仏を本質としており、かつ自らの中に一切の他者を包摂していることを論じる。それはまさに己心の中に曼荼羅が展開すると言ふべき人間観であり、著者はこのような「自己は本来、他者の全体である」という理解に基づけば、自己中心主義、エゴイズムを克服し、何事も他者との共生を実現しようとする方向に導くことができるとする (pp. 101-102)。

### 3 「Ⅱ 自己と環境」の概要

本章では、まず「自然との共生と日本の思想」において、現代文明を主導してきた科学的な「分割して支配する」(p. 110) という立場により、多くの環境問題・社会問題が起きてきたことが指摘され、それに対して仏教がどのような提言をなし得るのかを概観する。「Ⅰ 共生の思想」で扱った内容とも一部重複しているが、ここでは新たに天台宗で説く「草木国土悉皆成仏」の思想にも言及することで、日本において伝統的に掘り下げられてきた自己と自然との関係に関する知を再評価・再解釈する意義が述べられる。そしてディープ・エコロジーで勧めるライフスタイルを、人間観・自然観を実際の生活に結びつける一つの実践例として紹介する。

続く「己事究明としてのエコ・フィロソフィ」では、仏教思想を中心にした環境論が本格的に展開される。ここでは、唯識思想に基づく自己の心身と環境に関する認識構造、天台の「山川草木悉皆成仏」説の成立背景と展開、道元の『正法眼蔵』に説かれる山水の説法について、それぞれ詳しく説明し、それらに共通して説かれている自己と世界との一体性と、ネスの主張するディープ・エコロジーには相通じるものがあることを検証する。自己の究明はエコ・フィロソフィの基盤となりうるというのが、著者の主張である。

さらに「仏教に基づく生活指針—新大乘戒の提唱」では、ネスが環境問題の解決などの重要な要素として指摘するライフスタイルの転換について、仏教で用いられてきた戒律の面からの提言を試みる。仏教には出家者のための戒律（具足戒）や在家者のための戒律（五戒など）、最澄が重んじた『梵網経』の大乘戒などがあり、日本仏教では戒律がすたれる度に、戒律復興運動が展開された。著者はその中から、江戸期に活動した真言宗の慈雲尊者飲光に焦点を当て、慈雲が人々に広めた十善戒（不殺生・不偷盗・不邪淫・不妄語・不綺語・不悪口・不両舌・不貪欲・不瞋恚・不邪見）をまずは守ることが、現代人にとっては適切であろうとする。そして、十善戒に六波羅蜜と四無量心を加えた〈新三聚浄戒〉を提唱する。仏教における善悪とは、この世と未来の世にわたって、自他を益するか損するかにより決まることから、十善戒などを守ることは未来の他者をも益することになり、いわゆる世代間倫理の根拠ともなる。著者はネスが示したディープ・エコロジーのライフスタイルも参考にしつつ、仏教が「自然との共生・他者との共生・未来世代との共生をともに実現するような、さらに具体的な徳目やライフスタイルの指針を打ち出していくこと」(p. 225) が重要であるとする。

### 4 「Ⅲ いのちの深みへ」の概要

本章では、まず「人生の苦を見つめて」において、仏教で釈尊時代以来説かれてきた四聖諦（苦諦・集諦・滅諦・道諦）を『成唯識論』などに基づく解釈も含めながら解説し、苦とその超克法について考察する。仏教では、人生の様々な苦しみ（苦諦）の根底に無明があり（集諦）、そこからの解放（涅槃=滅諦）とは大乘仏教では生死のただ中において見出されるものである。その涅槃に至るための具体的方法（道諦）として、先に論じた〈新三聚浄戒〉などが挙げられる。著者は苦、とりわけ死に向

き合う実存的な苦しみを超えるために説かれてきた輪廻思想などを紹介しながら、最終的には、自己とは何かを明きらめることで主体を確立することの重要性を説く。そして、主体を確立した後は、他力信仰によって自己への執着を断つことで、逆説的に「日常のただ中に、いわば仏のいのちを生きるような、他者に積極的に関わっていくような主体が実現することになる」(p. 254)と言う。

続く「仏教の死生観——輪廻とは何か、そこからどう脱却するのか」では、現代においてもオカルト的な興味や臨死体験談などと結びつけられている「死」について、仏教で説かれてきた伝統的な輪廻の仕組みや死後の存在(中有)を、十二縁起説などを用いて説明する。ただし、著者は輪廻説と無我説の整合性を考察する中で、仏教では主体が確立した後、生と死の二元対立を離れる「不生」の立場に立つことで死を超克することを、禅や密教に基づいて主張する。

さらに、「仏教と神秘主義——禅と密教を中心に」では、「不生」も含めて様々に表現される仏教の「覚り」の世界について、『無門関』の第一則「趙州無字」、鈴木大拙と西田幾多郎の「見性」理解、『中論』の空思想、そして密教で説かれる自己と世界の合一性などを例に挙げて説明する。そこには、主客融合、平等無差別の一への没入、現実世界からの超脱といった神秘主義的側面も見られる場合があるが、著者は仏教とはそこにとどまるものではなく、現実生きる個としての人間の中に、自己を超えた存在(超個)としての仏が実現するのであり、この個と超個の矛盾的自己同一を見つめるのが仏教の覚りであると述べる。

## 5 おわりに

「あとがき」にもあるとおり、本書は共生、環境、そして我々の人生に横たわる痛みや死といった問題へのアプローチとして、「具体的な社会实践のあり方よりも、その土台となるべき思想の探究」(p. 308)を中心に論じたものである。よって、応用面でやや不足があることは著者も認めているが、容易には全体像を理解しづらいほど多種多様な仏教思想を巧みに組み合わせ、全仏教的視点から現代社会の喫緊の課題とも言うべきこれらのテーマに即応した議論が展開されている点で、本書が持つ意義はひじょうに大きいと思われる。本書を契機として、このような仏教思想を基盤とした、より実践的な社会的取り組みが行われ、これらの思想が真に生きたものとして世の中に還元される機会が増えることを期待したい。評者自身にとっても、それは重要な課題であると感じている。